要旨

キーワード:小学生　親子のコミュニケーション　学校適応

1. はじめに

教育実習（2014 年 6 月）による現場体験を通じ、子供の心身の健康の背景には、家庭の存在が大きいことを改めて強く認識した。日常的に家庭内で対話がなされていること、愛情が注がれているという実感が子供に伴っていることが重要だと感じた。そこで本研究は、親子のコミュニケーションが子供の学校適応に影響しているのではないかと仮説を立て、その関連のプロセスを明らかにする目的で行った。プロセスを検討するため、親子のコミュニケーション、家族への愛着、信頼感、レジリエンス、学校適応を測定する尺度を作成した。

2. 方法

調査は、東京都内の小学校 1 校の 5, 6 年生 107 名を対象に、個人が特定されないよう倫理的配慮を行い、無記名自記式アンケート調査を行った。無効な回答を除き、回収数は 100 名、有効回答率は 93.5%であった。尺度作成のために用意した各項目は、因子分析（主因子法、プロマックス回転）により因子の抽出を行い、親子のコミュニケーション、家族への愛着、信頼感、レジリエンス、学校適応の尺度を作成した。その後、親子のコミュニケーションから学校適応に至るプロセスを検討するため、作成した尺度を用いて繰り返し重回帰分析を行い、パス図を作成した。その後、Amos を用いて共分散構造分析を行い、作成したパス図の検討を行った。

3. 結果と考察

因子分析の結果、「親子のコミュニケーション」「家族への愛着」「信頼感」「レジリエンス」については 1 因子が抽出され、そのまま因子名とした。「学校適応」については「学校生活」「友人関係」の 2 つの因子が抽出された。

重回帰分析をもとに、共分散構造分析で検討した結果を図 1 にまとめた。「親子のコミュニケーション」は「学年」によって規定され、「家族への愛着」は「親子のコミュニケーション」「性別」によって、「信頼感」は「家族への愛着」によって、「レジリエンス」は「親子のコミュニケーション」によって規定されていた。「学校適応」では、「学校生活」は「レジリエンス」「家族への愛着」によって規定されていたのに対し、「友人関係」は「信頼感」「レジリエンス」と弱い相関がみられた。親子のコミュニケーションから学校適応に至る過程は、親子のコミュニケーションが愛着を介して関連するプロセス、愛着・信頼を介するプロセス、レジリエンスを介するプロセスの、主に 3 つの経路が認められた。

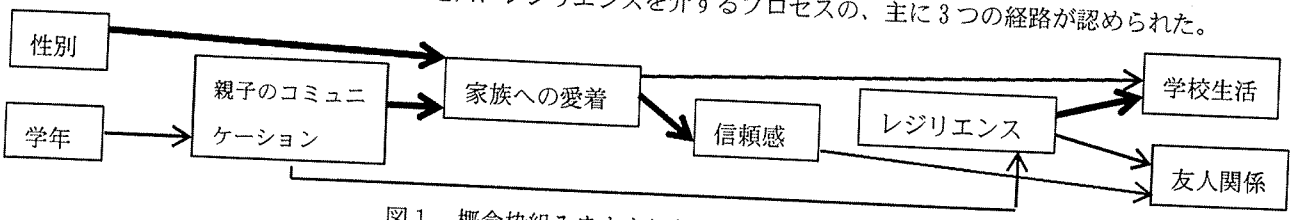

図 1　概念枠組みをもとにした共分散構造分析結果

図 1 より、学校への適応を高めるには、困難に耐え、立ち向かう力である「レジリエンス」が重要であることがわかった。また、親子のコミュニケーションは、その中で生まれる家族への愛着の度合いにより、学校生活への適応が影響される、と言える。コミュニケーションそのものだけが重要なのではなく、コミュニケーションを通して、愛着感を高め、親子の中で居心地の良さ、楽しさなどの感情を豊かに育むこと、また、レジリエンスを高め、困難に立ち向かう勇気と、常に応援されているという親の存在の大きさを実感させることが重要である。しかし、本研究では、学校生活を大きく導いているレジリエンスを説明する要因が弱いこと、学校適応についても部分的にしか関連が見られないことなどから、さらなる要因が存在していることも考えられ、今後も継続した調査が必要である、と考えられる。

4. 結論

親子のコミュニケーションから学校適応に至る過程は、主に 3 つの経路を通して関連性がある。学校適応のために、親子のコミュニケーションが重要な役割を果たしている。